

2010年(平成22年)3月13日(土曜日)

(10)

(10)

あつし塾長曰

## 子親のやる気

○○8

3月4日、県立高校 前期入試の日。テレビから「子どもたちは難関に挑んでいました」とニュースが流れてきました。私はとっさに「難関」という言葉に違和感を覚えました。それは、前日の夜遅くまで指導していた中3受験生を知っていたからです。

「難関」に挑むというよりは、まるで空想の世界で未知の出来事を待っているような感じさえしました。ゆとり教育世代の子どもたちの受験は年々変わってきました。特に今年の中3生は前日になんて、本人たちは緊張しているらしいのですが、なぜか私たちにはその緊張感が「リアル」に伝わってこなかつたのです。しかし「やらないと

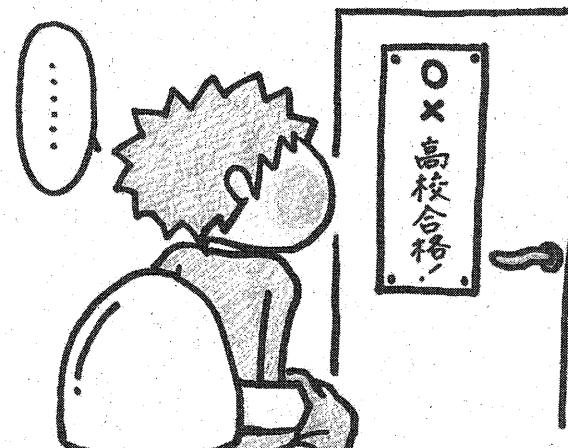
落ちるぞ!」と何度も何度も発破をかけてもさっぱり響かなかった子どもたちが、入試直後に自己採点をしてから、にわかに緊張した面持ちに変わっていました。去年までは随分違った驚きました。恐らく「入試」「受けた」「落ちる」という言葉からイメージした未来は「他人事」であったが、それが丸つけをしてやつて「リアル」になつた…ということだった

子どもが続出しました。親の送り迎えが当たり前のライフスタイルになってしまった。親も面倒くさいのか、例え熱を欠席する際の電話も「今日は遠足でない」ための口実を親の側も見破れないことが多いになりました。親も面倒くさいのか、例え熱を欠席する際の電話も「今日は遠足で疲れて帰ってくると思うので休ませます」と親が先回りして、子どもが同時に初めて経験したことでした。

最近の中高生には、何事も面倒くさがり、子どもが続出しました。親の送り迎えが当たり前のライフスタイルになってしまった。親も面倒くさいのか、例え熱を欠席する際の電話も「今日は遠足で疲れて帰ってくると思うので休ませます」と親が先回りして、子どもが同時に初めて経験したことでした。

## 口実を見破れない親たち

### 他人事



by yoriko

こんなに便利で安全な子育てでは、子どもは骨抜きになってしまします。不自由や不便を「逆境」というのなら、子育ては逆境をどうだけ経験させられるかが正念場でしょう。逆境の中で鍛えられることもできるし、未知の問題に対する想像力も豊かになっていくのではないかでしょうか。

歌で知られる八洲秀章(1855年)が教えた。「さくらの歌」はしおとさみハ先生ミハ先生タ一から奇長く所在し、戦後の映された。60年ぶりに岡市総合図書館(六四)神奈ジタル化)洲の次男でル俳優の沢

(畠山篤志学塾塾長)

## 教育

ニュース  
なぜなに

があるとして、米国で売った「レクサス」など420万台以上のマットやペダルを自動的に取りかえることになりました。

さらに今年1月、アクセルペダルに別の不具合があったとして、米国で乗用車「カムリ」など計

社長らは謝った上で、不具合が二度と起きないよう、同時にふんだ場合に、ブレーキが優先される仕組みを導入するなどの改変を打ち出しました。

2008年にライバル

